

討論

苦悶する中ソ社会主義の行方

菊地 昌典
中嶋 嶺雄

欲求,伴わぬ生産力… 特效薬か



ソ連最高会議幹部会議長に選ばれたアンドロポフ氏(右下)

ソ連と中国はそれぞれ、六月中旬に開いた最高会議と全国人民代表大会で、国家首脳の人事を決定した。新たな組織づくりを終えた両国は、どのような道を歩もうとしているのか。昨年十一月五日号の本誌で、中ソ接近の動きにメスを入れた菊地昌典、中嶋嶺雄両氏が、こんどの首脳人事をきっかけに両国の現状を分析、社会主義国家としての行く手をさぐった。

(編集部)

菊地 まずソ連について。六月一四、一五日の党中央委員会総会でアンドロポフ書記長が最高会議幹部会議長に内定、一六日からの最高ソビエト会議で正式決定されたわけです。昨年一月にブレジネフが亡くなって七カ月で、ちょうどブレジネフと同じようなコースをたどつ

て、共産党の書記長であり国防会議の議長、幹部会議の議長であるという強大な権力を手におさめた。絶え間なく一人の個人に権力を集中していくといういままでのパターンとそれほど大きな隔たりはない。これがまず第一点ですね。

それから、今度の人事異動では、私はペリシエ政治局員が死んだあとの後任を埋めるのかと思いましたが、結局、政治局員には補充が全くなかった。そうして、ロマンノフを書記及び政治局員という兼務の形で置いた。若い、六〇歳のロマンノフが発用されたことは、アンドロポフ体制の後継者づくりの一環と見る事ができると思う。

しかし、こういう人事の問題、権力の集中というごく一般的な変化のほかに、今度の中央委員会総会と最高ソビエト会議でのいきさつには非常に重要な面がいくつかあると思うんですね。

まず、イデオロギー的な締めつけが非

常にはっきり出された。チュルネンコ政治局員の演説の中で、社会主義の文化のあるべき姿の枠を決めるという発言がはっきり出された。

それから、これは非常に重要なことだが、労働集団制というものが公式に法律となつて発布された。これは二三カ条という、非常に長大な内容を持つており、社会主義の矛盾を集団労働という形で解決するもので、ちよつと中身は違いますが、中国でやっている生産調員制に非常に似たものが、農業のみならず工業の分野でも、そしていずれは商業の分野でも、行われる可能性を打ち出したわけです。

アンドロポフ体制は七カ月たちましたけれども、いままでは、細かい規律の引き締めとか、自分みずから工場へ行つて労働者と親しく話すとかいうことで、大本としてはブレジネフ体制の小規模な手直しみたいなものであった。しかし、今度の中央委員会総会と最高会議幹部会

す。武徳徳育研究所など次々に研究所を開設してしまふ。学生部職員を助教授や講師にしてしまふなどです。こんな補助金等適正化法に違反してますよ」(奥深山助教授)。

しかし、組合側が人事問題にかかりつきりになっているうちに、経理面での乱脈が進行していた。すでに、裏口入学など一連の問題で一九七八年度から五年連続、私学振興財団の補助金を四分の一カットされ、七億五千万円ほどに減額されているが、海外への不正な送金が表面化したのである。

八〇年四月にブラジル国士館大学協会を設立、ベレンとサンパウロに武徳館を建てるために、一〇億円を送金したという疑惑である。エジプトにもやはり武徳館を建てることで、三億四千万円。ニューヨークにも一億一千万円あったこともわかった。

ブラジルの一〇億円は、うち三億円が貸付金、七億円が寄付金として送られたというものの。私学助成の立場からみると、こうした送金は助成金の運用としては全く不適正なものである(しかし、参院文教委での五月一日の文部省の答弁は、一〇億円は全部貸付金で、七億円は寄付金というのは送金ミス、としている)。このほかにも、総長夫人の海外旅行費用を公費から出した問題もある。

大学関係者の間では、「職員の大盤探

用、海外送金、それに同窓会館の建設費などの設備費で、経理状態はかなり悪化しているのでは」という見方が一般的である。だが、経理は安高理事が事務局長をやめた七九年度以降は、一切明らかにされていない。

それにしても、これほどさまざまな疑惑や問題が一〇年以上もくすぶっていないから、いまだに学園が正常化しないのはなぜだろうか。

一つには、一族支配という学内体制の非近代性がある。梵天氏夫人は武徳徳育研究所の専任講師、長男は政経学部一部の専任講師でありながら短大副学長と国

社会の「右」需要に応える国士館教育

組合側は「改革の処方箋はすでに用意されている」という。それが七八年の諸問題対策委のまとめた改革案だが、教授会の自治を認め、学長選出を民主化する、という改革は、要するに同大学を普通の大学と同じにすることである。だが、総長側にとってみれば、これは右翼イデオロギーに支えられてきた同大学の特色が失われる危機ということになる。その危機感には、同大学への社会からの「需要」もからんでいるようだ。

今年春の卒業生の就職先をみてみよう。短大と大学を合わせて二〇〇四人のうち「警察官・刑務官等」が一九人と

警察部部長。次男が中学講師で、娘むとは教務課長、大学院事務長を兼ねる。死んだ安高氏にしても徳次郎氏の娘むこで、梵天氏とは義理の兄弟だった。

大学から中学までの各機関を代表する学長、短大学長、中学校長の選出規定もなく、梵天氏が兼任する。五人いる理事会の構成も、一人は各教育機関長互選(といっても、全部梵天氏が兼任だから梵天氏)、理事会による選出二人、評議員会選出二人となっており、評議員会は理事会がメンバーをえらぶわけだから、事実上、梵天氏の意に反するものは選出不能ということになる。

社会の「右」需要に応える国士館教育

最も多い。次いで自動車のセールスマンなどが多いが、高校教員が五七、中学が八六、小学校五六など教育関係が目立つ。これは武徳系を中心とする体育学部や文学部に教育学科があるためでもあるが、国士館が、警察や教育界と深く結びついていることを示す例でもある。

とくに、政経二部(夜間部)では、警察官、自衛官の現役が多く学んでいる。現職警察官による女子大生暴行強盗殺人事件の犯人、松山純弘も、事件当時、同学部に在学していた。

一方で教育界の側でも、「左翼ではな

あるということも事実だろう。

こうした背景に、学内改革を叫ぶ組合なども事態の推移をけつして楽観していない。「殺人ばかりがクローズアップされて、本質的な疑惑にメスが入らないのではないか」「地元の警察は国士館と仲がいい。一連の疑惑だって本気になって捜査していないのではないか。安高メモによると、文部省や税務署だってずいぶん総長側に、マスコミに注意しろなど、いろんなアドバイスをしている。大学の自治を逆手にとって、総長らの不正行為をむしろ擁護しているのではないか」という学生や教職員の声もある。

そして、学内の空気もそうした問題の深刻さとは裏腹に、盛り上がり欠いている。七三、七八年と二度の改革のチャンスに改革派が敗北したその挫折感がまだ漂い、無気力ですらある。そうした無気力のウラには、世間一般が、改革を叫んで立ちあがる学生たちに必ずしも好意的ではないこともあるだろう。

「改革運動なんかやったら、世間からもアカのレッテルを張られかねない。僕らは本当に当たり前のことを実現しようと思っているが、就職などを考えたらそれではできません」という学生もいた。

われわれ大人は、そういう学生を「三無主義」「世間ずれしている」などと批判する資格はあるまい。

(本誌・神野武美)

消費への 規律引き締めは 爆発する



李先念国家主席（左から3人目）ら中国の指導部

の発言を見ると、彼自身がいまの硬直化したソ連の社会主義を手直しせざるを得ないことを認め、それをソビエト国民に訴えた。しかしどうしたらいいかについては、いろんな深刻な矛盾が山積している。

中嶋 中国は六月一八日の全国人民代

表大会で、国家主席に李先念・政治局常務委員を選ぶなど、新しい政治体制が発足した。ただ、全国人民代表大会は新しい人事を決めはしたけれども、基本的にはすでに昨年の一二回党大会によって形成された鄧小平・胡耀邦型の党官僚独裁体制という大きな基盤の上に今回の全人代は乗っているといつてよい。毛沢東時代とは非常に違つて書記局中心の「赤い貴族」たちががっちり権力を握り始めている。そのベースの上での全人代の人事であつて、国家主席になつた李先念にしても全人代常務委員長になつた彭真にしても、実はいま中国で実際にそれほど重要な政策決定者、意思決定者じゃないですね。

今回見てますと、中国共産党の書記局

員を兼ねる陳丕顯とか楊尚昆とか万里、習仲勲というようなまぎれもない旧実権派、あるいは鄧小平・胡耀邦型の人たちが主要なところは握ってますね。したがつて、中国共産党の政治装置、党機構そのものがかなりソ連モデル・アンドロポフ体制に似てきているのではないか、という気がするんです。

そういう前提に立つて今度の全人代で、もし何か重要な問題を挙げるといわれれば、私は李先念が国家主席になつたことでも彭真が全人代常務委員長になつたことでもなく、まさに国家安全省という従来にない、新しい治安・公安機関を発足させたことだと思ひます。これは長期的に見て非常に大きな意味を持つと思ひんです。

つまり、中国における従来の公安機能としては公安省という警察のようなものがあり、党では党中央弁公庁、国際共産主義運動の関連では党中央対外連絡部、軍の中には軍総政治部の保衛部隊といったものがあるわけですけれども、こういう従来の公安機構では処理しきれない問題がいまの中国に非常に多く出てきているんですね。香港の中国系紙『新晚報』編集長のスパイ事件とか、テニスの胡娜嬢の亡命事件とか、魯迅の孫の周令飛亡命事件とか、先般の韓国へのハイジャック事件とかに見られるように、いわゆる開放体制の中で大きな社会矛盾が露呈し

てきている。

また『人民日報』は五月二九日に社説を掲げて、社会治安がいま非常に悪くなっているし、同時に公安機構がバラバラだから、治安・公安上の総合的な統治が必要だと力説しており、こうした状況を見て、私はまさにソ連の国家保安委員会（KGB）の中国版がよいよでき始めたという気がするんですね。

それから、もう一つは軍の役割で、鄧小平が党の中央軍事委員会のみならず国家中央軍事委員会主席を兼ねたわけですね。これについては鄧小平がそこまで握らざるを得ない不安があるんだという見方があつて、確かに一面ではそうだけれども、むしろ、最近の一連の動きの中で中国の人民解放軍が毛沢東型の軍から変形しつつあり、同時に軍が従来の中国の政治に持っていた役割をだんだん減じてきて、軍もそうした党官僚独裁体制のもとにコントロールされつつある結果だと見た方がいいだろうと思ひます。つまり、いよいよ中国もカリスマ的支配の時代から官僚的な支配の時代に入りつつある。その点でソ連の政治体質との類似性が見えつきり出始めているんじゃないか。

菊地 大筋でぼくは中嶋さんの意見に賛成なんですけれども、社会主義国家である以上、どう考えても選択の余地のない、不可避的な原則性というものがある。たとえばソ連も中国も一党独裁制で

あるから、それに伴って生ずるいろいろな組織上の類似点と矛盾は挙げられると思うんですね。それから経済問題。これは、これからの最大の問題になると私は思います。

ソ連の場合、いま一番問題になっているのは、労働者が働かなくなっていることです。

これはまた、もちろん中国にも当てはまる面があると思います。労働者を働かせるためには規律が必要であるというのがアンドロポフの書記長になってからの一貫した論理です。しかし、「規律を重視せよ」「規律を守れ」というスローガンだけでは労働生産性は上がらない。そうすると社会主義の組織全体の問題にかかわってこざるを得ない。これがいまソ連の当面している矛盾だろうと思う。

なかじま みねお 東京外国語大学教授。現代中国学・国際関係論専攻。一九三六年松本市生まれ。東京外国語大学中国科卒。東京大学大学院（国際関係論）修了。主な著書に『中ソ対立と現代』『北京烈烈』『中ソ同盟の崩壊』。



一方、中国はまだそこまで行っていないです。少なくともソ連は六十数年間つくり上げてきたハードで、しかも中国よりはるかに鎖国的な、しかも徹底した反体制運動の弾圧と労働組合運動の御用組合化の中でやられている政策に折り重なるようにしてアンドロポフの規律引き締め政策が行われているし、それと同

中 試行錯誤かさね收拾つかない中国

中 嶋 なにもソ連と中国とが全く同じとはいいません。中国にしろソ連にしろ、まさに社会主義国としての問題点をあまりにもたくさん持っている。そこで、「じゃあ一体どちらのほうがよく問題が少ないか」を考えてみますと、これも単純に比較はできないと思うんですね。おっしゃる通りに、中国はまだいまのソ連が当面している段階まで達していないという側面も確かにあるけれども、中国はこの間のいろいろな試行錯誤の中でソ連の経験しないこともやってみたい、いろんなことをやり過ぎました。その結果、いま中国自身、実際には收拾がつかなくなっていると思うんですね。

たとえば、締めつけの問題にしても、ソ連のほうがよく厳しいといわれるけれども、果たしてどうか。これは中国の政治スタイルとか政治文化にも関連すると思うんですねけれども、中国においては常

時に集団労働制という国家の基礎を崩すかもしれない政策をとらざるを得ない状況だ。そういう矛盾と、中国の農業において現れている諸生産制とは、ちよつと次元が違うと思う。

また、ソ連と中国とを比べて、現在どちらが開放的かといえ、やはり中国ですよね。

にイデオロギーとか道徳によって上から大衆が教化されてきた。そういう状況の中で精神的にさいなまれるという点では、中国式の政治つまり抑圧はまたそれなりにすごく厳しいと思う。たとえば魏京生のような反体制活動家はまたたく間に懲役一五年に処せられる。サハロフ博士はいくら抑圧されても西側の記者に訴えることができるけれども……。

菊地 ぼくはサハロフ救援運動やってるから、とてもそうとらえられない。

中 嶋 だけど、中国の場合はもっと厳しい。魏京生らが西側の記者に自分の主張を訴えることなんて絶対できないんですね。

生産諸負制については、いま、毛沢東型の人民公社のモデルを崩し、自留地をすごく拡大してますでしょう。自留地も多いところでは六、七十%、八五%なんてどこまで行っちゃってる。だけどこ

れだと、それが社会主義の根本的な原則に抵触しますから、やっぱりまた締めつけが行われるだろうと思います。一見中国の社会主義に救いがあると、もし菊地さんが考えてるとしたら、実はそう甘くはない……。

菊地 いや、救いがあるというんではなくて、中国はいまも新しい道を摸索中であるということです。ソ連の場合は、でき上がっている中での模索ですよ。

中 嶋 まあ、それはそうでしょうね。

菊地 たとえば、ソ連ではもう六〇年代からさまざまな試みがされてたわけですよ。工業分野ではシチョーキノ方式という小さな規模での諸生産方式（資金の総ワクとノルマの固定）をとったことがあり、その能率のよさは認められてたにもかかわらず、全部つぶれちゃった。労働者が営々として築き上げてきたフォンド、利潤を工場の管理部なりその上の監督機関が全部吸い取り、労働者の意欲を失わせたからなんです。いまソ連の農村では、指令によらないで農民がある耕地を請け負って生産をする形の非指令方式生産隊が盛んに奨励されてますけれども、その場合も、計画経済に伴ったさまざまな形の妨害要因が出ています。ぼくの読んだ例では、四人の機械化要員が一五〇〇ヘクタールを引き受けてものすごく生産効率を上げるわけですよ。そのため肥料もいるし、農機具もいるんですが、彼ら



まぐち まさのり 東京大学教授。ソ連政治史・社会主義論専攻。一九三〇年東京生まれ。東京大学大学院（農業経済学科）修了。主な著書に『歴史としてのスターリン時代』『トロツキー』『中ソ和解』。

菊地 しかし、農業はうまくいってますよ。その功罪は別としてね。

中嶋 いや、農業がうまくいってるとのは、いままでの農業があまりにもマインナスが多かったために消極的な意味で最近の農業生産がかなり上向いてきているとか、農民に意欲が少し始めているとかということですよ。自留地を拡大したり、生産額負担制にしたわけだから、それは当然でしょう。そのことは何も社会主義なことは中国共産党の政策がうまくいっているというんじや決していない。中国の計画経済全体が今後大きく発展するというバラ色の見通しは、いまのところ全く描けない。その間に、いろんなサボタージュとか幹部の特権化とかいう社会主義体制に共通の問題がたくさん出ている。つ

菊地 ソ連が中国の後追いをする側面も

中嶋 その議論はさておくにしても、冒頭の私の分析でもう一つつけ加えたいことは、中国の場合、政治的にはソ連より不安定ですね。いまの鄧小平・胡耀邦型の指導部としては、必死になって非毛沢東化、ないしは鄧小平・胡耀邦型の戦

略を中国社会に植えつけなければいけないが、これには鄧小平の肉体的な限界つまり寿命ということもあって、残された時間はあまりないと思うんです。そこでいよいよやり始めるのが、この最近の

まり、もし本格的に中国が新しいモデルをやるならば、やっぱり社会主義であることを棄てざるを得ないと思うんですね。あるいは中国共産党の一元独裁をやめざるを得ない。あるいは経済特区を単に深圳や厦門のようなああいう沿岸諸省の限られたところではなくて、もっと広げる。広東省とか福建省全体を思い切った経済特区の実験場にすれば、まだまだ見通しがあるかと思いますが、それはなかなかできない。

そういういろいろの制約要因があり過ぎる中でいまの中国が模索している状況を見ていくと、どうもはつきりしたモデルがない。全部消していくと、残るのはソ連との共通性ということになる。

一〇カ月、特に去年の一二全大会前後からの新しい整風運動、あるいは新しい中国版行政改革でして、このねらいを一口にいうと、四千万の中国共産党員を大幅に入れかえることです。現にこの春くらいから、あちこちで、「鄧小平パーズ」がやられてるし、最近の例では、文革のとき劉少奇なんかやったように工作組を派遣して、地方の党委員会がいまの路線に反逆しないように工作している。そして文革派殘党を根こそぎ入れかえている

ようです。ですから、いま中国社会で、表に出てきている全人代の人事といった派手な動きより、もっと重要な問題は、政治社会のそうしたトータルなつくりかえ、地方末端に及ぶ新しい人的な入れかえが行われていることで、それを巡って目に見えないところでかなりボルテージの高い社会変動や軋轢が起りつつある。

菊地 うん、それはわかりますけど、もう少し低くなりに根本的な問題に戻してみると、ソ連でも中国でも共産党員の割合は大体四割から七割なんですよ。それが経済も政治も文化もすべてを牛耳るところからさまたげまな問題が出てきている。

同時に、中国一〇億、ソ連二億七千万の人間が絶えず生活水準の向上を望んでいる。特にソ連の場合には、飼料穀物を大量に輸入しなければならぬという状況があるし、中国でも消費欲求が爆発的に増えてきている。そういう矛盾を共産党がどう解決できるかというのが、いまソ連共産党、中国共産党の両方がぶつかっている問題だと思えます。そして、その問題を解決するためには、中嶋さんの言葉をかりれば、社会主義でなくしてしまわざるを得ない。しかし、社会主義でなくしてしまえば、また再び生産手段の私有が復活し、地主あるいは資本家が復活するという状況もないわけではない。

だから、中国の場合には、中国版ネップ（新経済政策）の段階であるといえる。

一方、ソ連の場合はネップではないんですね。ネップなんてのはとくに通り越しちゃって、何とかハードな一党独裁の下での労働者の勤労意欲の低下を引き上げられないかということであり、それが今度の集団労働法の制定となっている。だからある意味では、ソ連が中国の後追いをしている面もあるんですよ、表面的に考えれば。

中嶋 そのへんの評価は非常に難しい問題だと思えますね。確かにおっしゃるように、中国がやっているような実験をソ連がやり始めてるということもいえるとは思いますが、逆に中国はせっかくつくった人民公社を崩してるんですね。その場合、いまの鄧小平、胡耀邦は結局は劉・鄧路線ですから、高級合作社の前の初級合作社とか互助組ぐらいまでのところの考え方にいくんじゃないか。いずれにしろ社会主義は、生産のシステムとして、あるいは大衆の消費欲求なり経済的に豊かになりたいという庶民の欲求を満たす制度として、根本的に欠陥があると思うんです。

そう考えると、結局これは、一種の先走った革命の悲劇です。

つまり、いま革命を成就させた国々はみんな「近代」を欠いた状況の中で革命が起きてきてる。今後出てくるアフリカ

とかラテンアメリカもそうでしょう。かといって、社会主義になるための歴史的な成熟がなくても、腐敗した権力を打倒しようとして革命が勝利することはあり

第 地 農民への融和策で安定度増す中国

第 地 それを悲劇ととらえる点は、ぼくとちよつと意見が一致しませんが、そういう後発国にしか社会主義体制が現出しなかったことは、はっきりしています。しかし、ソ連の場合、ロシア革命の段階が少なくとも中国よりはるかに高い発展段階であったことは確かです。そ

得ます。それが歴史に対する反逆かという、必ずしもそうとはいえない面がある。そういうところにいまの悲劇がある。

してそれが七〇年近い年月を経て当面している矛盾が何かというと、労働者が働かない、欠勤が多いということです。ソ連の経済学者の計算だと一分間のロスが一〇〇万円（二ギル約三四〇円）ということですから。それを解決するためにどうしたらいいのかソ連の当面している問題



「サハロフを自由にして！」とボンで訴える家族たち

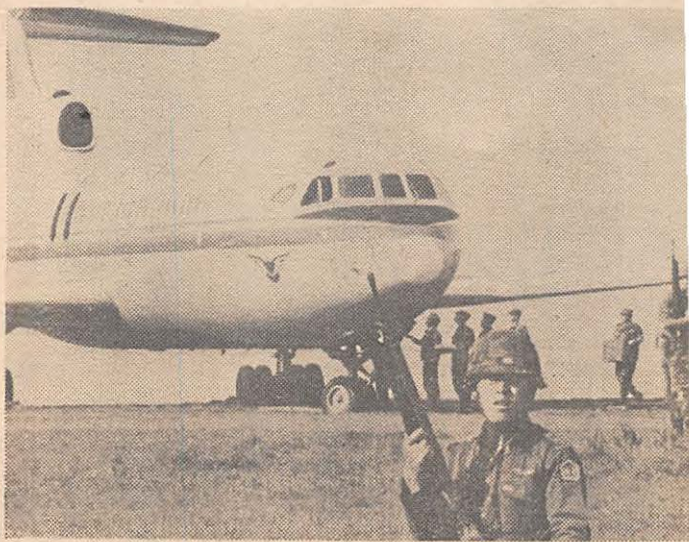
であって、中国の当面している問題とはちよつと違ふんじゃないか。

中国のいまの共産党の安定度についてはぼくは中嶋さんと逆で、農民に対する融和政策、生産調剤の波及という形で、人口の八割という農民の支持を少なくとも取りつけようとしており、かなり安定度を取り戻したと思う。ソ連の方

すよ。

中嶋 ぼくは中国についても厳しく見ざるを得ませんが、いずれにせよ将来、成熟した社会主義の中からそれを離脱しようとする動きが出ることは必然的だと思う。社会主義の生産力が少しでも高まれば高まるほど、あるいは市民的自由が少しでも拡大すればするほど、体制に対する不信感が強く出てくる。つまり、歴史は逆回転して、社会主義社会における「進歩」あるいは「革新」とはその体制から離脱することであるというふうに動いていくんじゃないか。しかも、その体制から離脱しようとすることは大変な、これはもう命をかけての闘いになるでしょう。映画『灰とダイヤモンド』の主人公マチエックみたいな行為者が、今後の社会主義の社会の中に数多く出てくるんじゃないでしょうか。

第 地 ぼくも含めてマルクス主義者は、いままでのソ連、中国などの社会主義国はマルクス・レーニン主義にのっとった社会主義だと考えてきましたが、そうではないと考えた方がずっと理解しやすいんです。最近ソ連とか東欧から亡命した社会主義者たちは「リアル・ソシアリズム（現実社会主義）」という名前を使っている、これをいわゆるソシアリズムと区別する傾向が非常に強くなっています。このリアル・ソシアリズム、言葉をかえていうならば発展途上国型社会主義の当面



ハイジャックされ韓国に現れた中国民航機

てくると、中国もソ連を従来のように全く無視するとか敵視するとかいうのとは違って、お互いの共通基盤を意識して行く。

多くの仮説からすると、内政的な非毛沢東化は当然中国の世界戦略の非毛沢東化につながっていく。一九六〇年代以降、一方では文革があり、毛沢東のソ連に対する大変強い敵意があり脅威感があり、地下壕を掘っても対ソ人民戦争を戦い抜くんだという姿勢が中国の対外政策の根本になっていた。米中接近もそういうところから出てきたし、日中正常化にもそういう背景があった。ところが、最近中国のリーダーの対ソ認識が根本的に変わってきて、ソ連を脅威と感じなくなりつつあるとぼくは見てるんです。そういう状況の中で最近の中国は従来と違ってすでに米ソの中間に位置するという自意識を持ち始めている。

中嶋 そこで、対外的な関係に目を転じてみましょう。菊地さんは『中ソ和解』をお書きになったし、ぼくも『中ソ同盟の衝撃』といういささか刺激的なタイトルの本を書いたんですが、こういうふうに社会主義の未来展望が厳しくなっ

七〇年代のいわゆる反覇権戦略は大きく崩れてきて、それに従って米中関係は、台湾問題のみならず他の面でも、か

なり長期的に冷却化していくと思えます。

ただ、その裏側に、国際共産主義運動のある種の再編みみたいな動きが出ているんですね。

かつて対立していた兄弟党との関係の修復が著しい。ご承知のように、早いところではスペイン、イタリアの党とも修復したし、フランス共産党やソ連派インド共産党とも修復した……。

アンゴラ、エチオピア、南イエメン、リビアやニカラガなどソ連の影響力の強い地域や、従来中ソが多数派工作のし

中嶋 長期的困難の中で連携強める両党

菊地 ソ連の対外活動は、いま中嶋さんがいわれた地域においては相変わらずの覇権主義路線をとっています。ただ、いま中嶋さんがいわれたことが国際共産主義運動の再編なのかどうかについては、かなり大きな意見の食い違いがあると思いますよ。話をちょっと前に戻すと、たとえば文革時代に毛沢東が中心となつて出した「ソ連『社会帝国主義』論は、中国の内部政策自身によって論理的基盤が失われたし、「修正主義」という言葉もほとんど聞かれない。

中嶋 最近「覇権主義」も正式な文書から消えちゃいましたね。

菊地 うーむ。そういつていいのかど

のぎを削った修羅場であったところと中国との関係も改善されてきている。また、中国と北朝鮮との最近の緊密化や先般の中蒙間のいさかきもソ連を刺激しておらず、中ソ改善に抵触する動きではありません。

それらのことから、ぼくは、さっきいった社会主義が共通に抱えている問題に対する認識が強まれば強まるほど、国際共産主義運動はかつての論争と対立あるいは分派分裂の論理を否定して、だんだん収斂していくのではないかと、見るんです。

うか、ぼくはちょっと問題だと思うけど、ただ一つ、中嶋さんの意見と一致するのは米ソの中間に立つということとです。中間という表現が正しいかどうかはわからないけれども、アメリカも批判し、ソ連も批判するという姿勢に戻りつつあることは確かですね。これは「三つの世界」論を破棄しない以上、当然原則的には出てくる路線で、別に珍しいことでも何でもありません。非同盟に風していない非同盟路線です。

それから、各国共産党との関係修復についてですが、私、今年四月に中国へ行って、おそらく日本人として初めて中央党校で講演しました。その人たちに聞

くと、ユーゴとかフランスとかイタリアとかいうところの党の理論代表が中国共産党の党校と交流を持っているわけですね。党関係がどんどん修復されていることははっきりいえると思います。

ただ、それが国際共産主義運動の再編につながるのかどうか。私はいまのところつながらないと思います。

それから、中国はソ連を脅威と見ないようになってきているとおっしゃるけれども、依然としてやはりソ連脅威論はあると思うんです。銭其琛自身も中ソの和解がそう簡単には進まないということを最近いっています。

中嶋 いや、まず前者の国際共産主義

運動については、確かにソ連も中国もかつてのコミンテルンとかコミンフォルムとか、あるいは中ソの激しいせめぎ合いの時代へは、お互いに傷もありますから、戻りたくない。

あの時代は、一方において毛沢東が旗頭となって「毛沢東思想は世界を照らす」といって、徹底的に毛沢東思想によって国際共産主義運動をリードしようとしたわけですが、いまの胡耀邦はそういう国際共産主義運動は考えてないし、そんなことをいおうとする人に対しては苦虫をかみつぶしたような顔をすると思います。

しかしながら、さっきいった社会主義の将来像みたいなことを考えると、社会

菊地 中国はソ連をモデル視していない

中嶋 さっきいったように、既に米ソの中間になっているから。いまの中国の指導者はソ連が攻めてくるから国境に膨大な軍勢力を張りつけておこうとは考えなくなっていますね。

だから、人民解放軍は今後徐々に削減されるでしょうし、現に削減しようとしているわけですね。本当に脅威があればそんなことはない。そして、ソ連の脅威のみを対象とはしない、よりグローバルな、国際的な戦略体系の一環を担い得るような軍事中国を再編成しようとして

主義そのものが長期的に非常に困難な問題を持つてきている。そういう中で、共産党同士がお互いに経験を交流し、いつてみれば傷をなめ合いながら連携していくということがやっばり出てくるのではないか。

さて、さっきのソ連の脅威をどう見るかという問題について反論させていたけど、確かに全人代での趙紫陽首相の報告でも一応ソ連の脅威についてうたっているんですね。

だけど、ぜひ菊地さんに見ていただきたいのは、毛沢東・周恩来時代とはソ連に対する考え方が根本的に違ってきているということです。

菊地 うん、そりゃそうですよ。

いるわけです。

こういう中国のリーダーたちの対ソ脅威観の変化は、同時に米中関係に対する猶疑心みたいなものにつながっているから得ないわけで、この問題は八〇年代の国際政治にかなり大きな影響をもたらすのではないかと。

ただ、どうも気がかりなことに、これは中国自身がそういっているとは必ずしもいえないけれども、日本の軍勢力の増強あるいは日米関係の強化が中ソ和解を促進するのではないかという声が出てき

ていることです。

将来、日本が、中曽根首相が初期に考えたような形で防衛力を増強しようとしたら、中国は明らかに「日本軍国化」、「右傾化」という非難をするのではないかと、と思います。去年の教科書問題にもその片鱗が見られたわけですね。

そうすると、かつて五〇年代に日本軍国主義というものをターゲットにして中ソが軍事同盟を結んだように、八〇年代に新しい冷戦がもつと激化するときがくれば、ひょっとすると中ソが何らかの同盟関係を結ばないとも限らない。

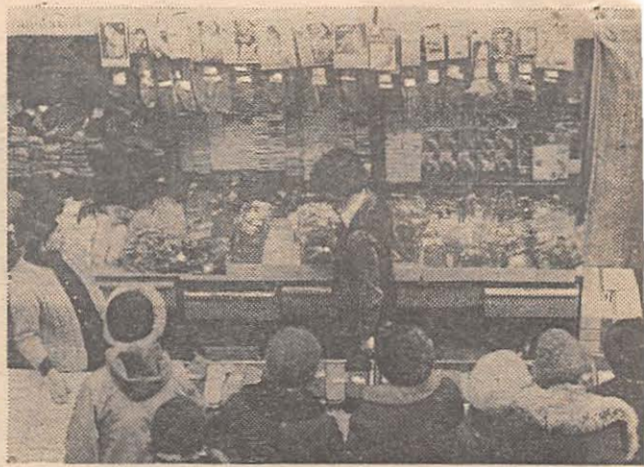
同時に、これは私のきょうの立論の根本なんですけれども、東側陣営なり社会主義なりがいろいろ深刻な問題を内在的に抱えれば抱えるほど、それらがもういつべん団結するという要因が出てくるんじゃないか。

菊地 その点は事実認識がかなり違うんです。中国自体の中にソ連の評価についてかなり意見の相違があることは事実です。しかし、ソ連が中国と同じ社会主義国で、同盟国、友邦であるという認識はないですね。また、ソ連をモデルにするという考えもない。

それはなぜかという点、ソ連の対外政策が一つ、非常に大きな問題としてあるからですね。一九六〇年の中国に対する経済・技術援助の停止。六九年の国境紛争。もつと広く見ればベトナムとかアフ



中国で進むミファッション革命、



モスクワのデパートに並ぶ下層

ということとははっきり認識してるわけですよ。

それから中ソの和解かどうかという問題は大きな国際政治というグラウンドの中で判断しなければならぬと思うんです。文革以後、ソ連の膨張政策とアメリカの対中政策、特に対台湾政策の二つを踏まえて、いま歩み出そうとしているのは非同盟・中立の道です。ユーゴの指導下にある非同盟国家群への仲間入りというのを希望してるわけけれども、しかし、非同盟に入る資格はないんですね。核兵器を持っているし、安全保障理事国でもあるし……。ですから、非同盟路線をとりながら、米ソの世界核戦争という危機をどうチェックできるのかという路線にいま転換しつつあると思うんです。

中 嶋 まだまだ中ソ接近は進むと思う

中嶋 第三世界ですね。

菊地 そうです。で、問題はソ連脅威論につながるんだけど、中ソ国境の兵力引き揚げとかカンボジア、アフガンとかいう問題をどこまで中国が前面に押し出して中ソ和解の条件にするかという、その点では私は中嶋さんに近いんですね。それほどその問題に固執はしないだろうと思うんです。しかし、そのこと

によって成り立つ中ソの和解は、国家

軍縮の問題をとりますと、中国はソ連と同じ陣営に属すると考えていいんですか。

菊地 いや、全く同じ陣営じゃなくて「米ソ二大覇権国に対する覇権主義反対」という路線ですね、いまのところは。

中嶋 いや、現状はそうなんですがね。

菊地 将来もそうです。

中嶋 ぼくはそこが違うんですね。将来は社会主義国として徐々に一体化せざるを得ないんじゃないか。

菊地 なぜ一体化しなくちゃならないんですか。

中嶋 共通の基盤を持っているからです。たとえば、社会主義自身が内在的に崩り崩されるかもしれないという危機感。それから、さっき菊地さんがおっしゃったような、社会主義そのものが持っている矛盾。それはやっぱりぬぐいようがない不可避的な共通性でしょう。そういうものに立脚している限り、国家と国家の間の修復にとどまらず、当然党と党との間の修復になりませんか。

菊地 組織構造、経済構造、政治構造その他の面で共通した問題が社会主義の問題としてあるのは事実です。しかし、それがなぜ中ソの和解の条件になり得るのか。現実にはソ連の膨張主義を中国が警戒し、それはまたアメリカに対しても同じであるという状況の中で、なぜソ連に

接近しなければならないのか。中国は「自力更生」というのを文革以降まだ一応持ってますけど、西側に大きく傾斜しているということはいうまでもありません。いま、中国の対米政策は一見非常に矛盾した形を取ってますよね。胡娜事件についても、いろんな亡命事件その他についても、表面は非常に強硬ですが、実際は非常に柔軟な姿勢をとっています。中国がこういう柔軟両様の使い分けをしてジグザグに進んでいるのは、西側の援助がなければ「四つの現代化」は実現できないというはつきりした認識があるからだとぼくは理解しているわけです。

中嶋 この一年をふりかえっただけでも米中ソ関係は大きく変わっています。SS 20の極東配備についても、中国はほとんど沈黙したままですね。私はまだまだ中ソ接近は進むと見ています。

(写真：W P)

朝日新聞縮刷版

6月号 7月23日発売 3600円

朝日新聞・朝夕刊1ヵ月分の全紙面を収録。詳細な索引付き。

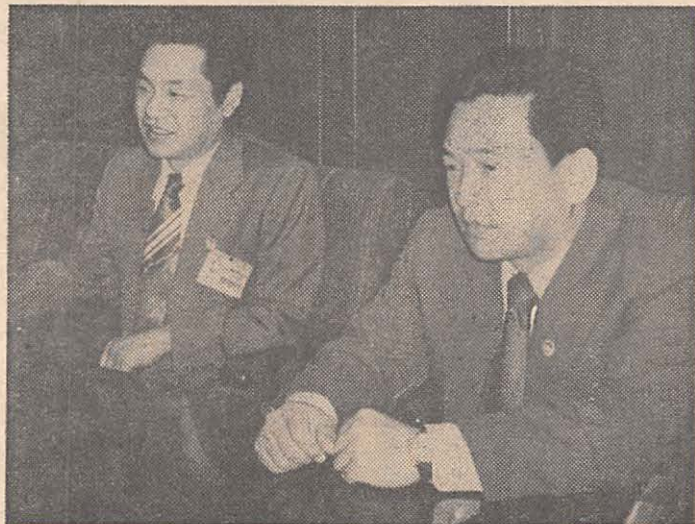
参院選 自民安定多数

一家5人を惨殺 東京

米・女性初の宇宙飛行

もよりの朝日新聞販売店、または書店でお求めください。

よど号ハイジャック事件 田宮高麿会見記



北朝鮮・平壤で開かれた「世界ジャーナリスト大会」に正式参加した田宮高麿(左)と小西隆裕の2人(筆者撮影)

人参酒をなめつつ 祖国の家族を思う日々……

一三年前、日航機「よど」号を乗取り北朝鮮に飛んだ赤軍派グループは、いまどんな思いを胸に日々を送っているのか。二人のリーダーが率直に語った――。

(編集部)

梶谷 善久

七月二日から六日まで、反帝・平和・友好の旗をかかげて一八カ国から一六九人の記者や言論人が集まって、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の首都平壤で世界ジャーナリスト大会が開かれ、私も日朝文化交流協会代表として参加した。

その本会議一日目、エルサルバドルのフランシスコ・グスマン記者の演説が終ったとき、議長の間際ジャーナリスト機構イジ・クブカ書記長の声が会場にひびき渡った。

「次の報告は『日本を考えるグループ』代表のミスター・タカマロ・タミヤにお願いします」

わが耳を疑うとはこのことだ。田宮高麿その人ではないか。一九七〇年三月三十一日朝、羽田発福岡行き日航旅客機「よど」号を富士山南上空で乗っ取り、韓国・金浦空港でのだまし工作を見破っ

て、四月三日夕方、北朝鮮の平壤・美林空港に着陸した赤軍派学生九人のリーダーにちがいない。

すでに北朝鮮入りしてから一三年。その間、朝鮮の自主平和統一支持日本委員会の岩井章氏ら、きわめて少数の日本人と非公式に会ったことはあるが、このように公然と大衆の前に姿を現したのは、はじめてである。私もこれまでの訪朝とともに何度かインタビューを求めたが、実現しなかった。

田宮代表が登壇した。日本を飛び出したのが二七歳だったから、今は四〇歳の中年らしい落ち着いた見え、がっしりした体格ながら、往年の過激派らしきさも、亡命者にもなう暗い影もまったくない。背筋を真っすぐに伸ばして、用意した原稿を手にはや早く口で演説した。それでも規定時間の一〇分間では終わら